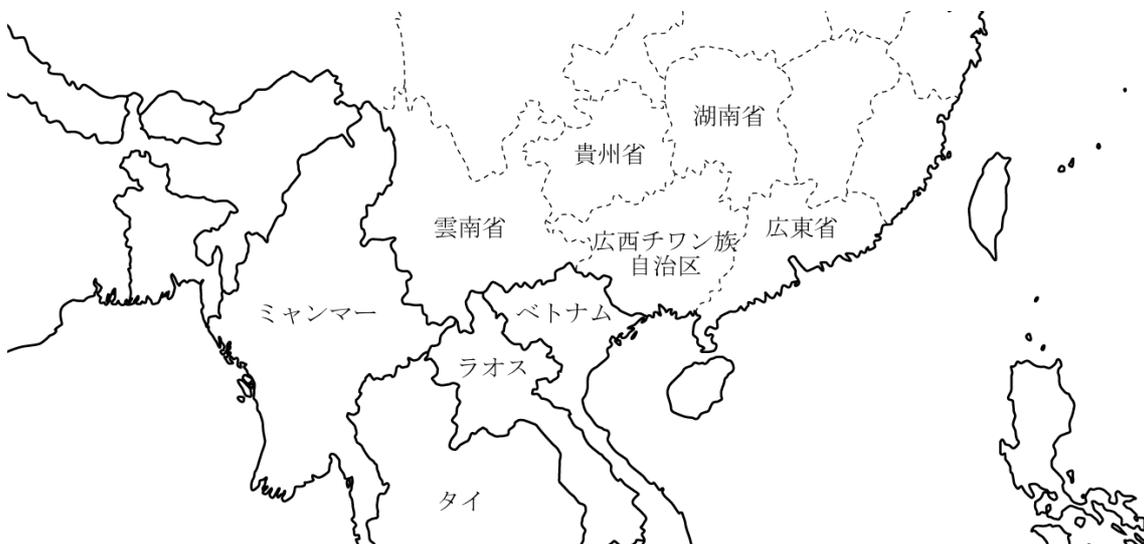


## 第1章 序論—問題の所在—

本章では、過山系ヤオ族(ミエン)の伝承し、彼らの信仰している神々が描かれている掛軸(掛物)について、これまでに明らかにされてきたことを述べるとともに、本研究の課題を示す。この掛軸は過山系ヤオ族(ミエン)の祭司によって所持され、儀礼の時しか使用しない重要な法具である。なお、本論では、この掛軸に対して、「儀礼神画」という語を用いる(以下、神画と略す場合がある)。

## 第1節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画研究の課題

過山系ヤオ族は、民族自称を「ミエン」といい、ヤオ族の中において最も移動性に富む集団であるとされる[吉野 1994: 94]。ミエンは中国南部の主に湖南省、広東省、広西壮族自治区、貴州省、雲南省に分布し、さらに国境を越えてベトナム、ラオス、タイ、ミャンマーの北部の山地にも広く居住している。



〈図1〉中国及び東南アジア北部のミエンの分布地<sup>1</sup>

ミエン儀礼神画に関する研究が始まったのが、80年代初頭からであると考えられる。現在まで出版されたミエン儀礼神画に関する著作は非常に少なく、専門書を書いたことのある研究者は Jacques Lemoine のほかにいない。このフランスの民族学者は、*Yao Ceremonial Paintings*[1982]の中で、自分と8人の個人収集家による収蔵品が紹介されており、約200点の

ヤオ族儀礼神画を掲出している。著書には、Lemoine 自身がタイ及びラオスに居住するミエンの現地調査の際に撮影した写真を載せ、ミエンの日頃の儀礼について簡単に解説している。神画の部分では、Fam Ts'ing, The Three Pure Ones(三清)・The Jade Emperor and the Master of The Saints(玉皇と聖主)・The Celestial Masters(天師)・Tai Wai, the High Constable(太尉)・Hoi Fan, 'The Sea Banner'(海幡)・The Governors of This World and The Waters(陽間と水府)・The Governors of the Sky and The Underground(天府と地府)・The lords of the Ten Tribunals of Hades(十殿靈皇)・The Marshals(元帥)・The Three Generals(三將軍)・The Ancestors(息壇)・The Forebears(家先)・The Dragon Bridge of the Great Tao(大道龍橋)・The Enforcers of fasting and chastity(禁齋と禁庚)・P'an Hu's Five Banners of knights(五旗兵馬)・Masks などの章を分け、膨大な画像資料を提示したと共に、神画に描かれている神々ほどのような神であるかについて論じ、神々の装束・姿勢・服飾などについて紹介した。だが、残念なことに神画が使用される儀礼を踏まえた神画に関する分析や論述はなされていない。神画を用いる儀礼及び儀礼文献などについても全く触れていない。

この著作の他には、神画と関連する写真集が出版された。Jess G. Pourret は *The Yao. The Mien and Mun Yao in China, Vietnam, Laos and Thailand*[2002]の中で、中国・ベトナム・ラオス・タイに居住するミエンとモン族が持っている儀礼神画の写真資料を掲載すると共に簡単な説明文を加えた。但し、Jess G. Pourret が神画は神画に描かれている神の位の高低によって順位があることについての考察がないので、神画の掲載順番には無秩序が感じられる。そして神画が使用される儀礼や宗教文献にも触れられていない。また、*Thanh Thờ Các dân tộc thiểu số phía bắc Việt Nam Qũy Đông Sơn Ngày Nay*[2006]の中では、セットとなるミエンの神画の写真資料が掲載され、主に写真を中心的に紹介する図録であるため、簡単な説明文しか加えられていない。また、*Taoist Painting of Northe Vietnam* [2008]の中で、ミエンを含むベトナム北部の諸少数民族の儀礼に用いられる神画の写真資料が掲載され、目玉として The long scroll・Yin xianglu・shengdao xinglong の種類の神画について詳細な読み取り分析が行われ、神画に示された事物や神々について丁寧に解説されている。The long scroll と shengdao xinglong 神画は、それぞれ *Yao Ceremonial Paintings*[1982]中の Tom To Luang Tsiau(大道龍橋)、Tsong Tan(息壇)及び Chia Fin(家先)神画に似るが、神画の構図及び内容は同様ではない。著作にはミエン系の神画は約 2 セット紹介され、神画に描かれる内容に対して解説しているが、やはり神画を用いる儀礼及び儀礼文献に関する考察に触れていない。ただ、以上述べたこれらの写真集に掲載されたミエンが丹念に保管されていた儀礼神画の写真は非常に精美であり、神画に描かれる内容を比較分析する参考資料としても貴重である。

中国国内におけるミエン儀礼神画に関する研究は、21 世紀に入って始まった。現在まで出版

された専門著作はない。儀礼神画に関する研究分野で活躍する黄建福は修士学位申請論文「盤瑤神像画研究—以广西金秀县道江村古堡屯盤瑤神像画為例」[2008]の中で、广西金秀县道江村古堡屯のヤオが持っている神画の製作状況を紹介すると共に、神画に描かれた神々及び神画を用いる度戒儀礼及び葬送儀礼について簡単に紹介し、芸術人類学の角度から儀礼神画を考察し、神画の持つ美的な意義を論及した。これ以外には、同じく黄建福は「盤瑤神像画之作画目的及社会作用」[2009a]の中で、神画は宗教儀式の媒介とするものであり、宗教観念の絵画的表現であり、自民族の歴史文化を認識する重要な手段であると言っている。「論芸術人類学視野中的盤瑤神像画」[2009b]の中では、神画はヤオ族の宇宙観念と宗教芸術の表現であると言っている。「論瑤族神像画研究的文化意義与現代價值」[2012a]の中では、神画の文化及び研究上の価値を述べ、どのようにヤオ族の神画芸術を保護し伝承するのかについて提案した。また、「論瑤族神像画的源流及其与瑤族傳統文化的關係」[2012b]の中で、神画の起源は道教の神像絵画芸術であると言っている。「論瑤族神像画的源流」[2012c]の中では、神画は魏晋時期に道教と共にヤオ族地域に伝われ、現在の神画の様式が形成されたのは明清時代であると言っている。「論盤瑤神像画的審美意識及其芸術風格」[2010]の中で、神画の構図や遠近法や様式などから見た神画の持つ美的な意義に論及した。黄建福の他には、周飛戦は「永州盤瑤神像画研究」[2011]の中で、神画の芸術的な特色や巫教及び道教との関係などについて簡単に述べ、ヤオ族社会において神画が祭祀と教育の役割を果たしていると言っている。

また中国湖南省永州市藍山県及び広西壮族自治区恭城瑤族自治県のミエンが伝承している儀礼に用いられる儀礼神画に関する報告及び考察は、拙稿の「還家願儀礼における神画の使用について」[2012b]、「ヤオ族に見る『三清神』について—中国湖南省藍山縣匯源郷湘藍村の三清神画及び宗教文献からの考察」[2012c]、「神画の複製作業からヤオ族文化の保存と創意を考える」[2012d]、「ヤオ族儀礼神画の研究—広西チワン族自治区恭城ヤオ族自治県蓮華鎮黄泥岡村盤王祭を事例として—」[2014b]がある。

以上を踏まえた上で、これまでのミエン儀礼神画に関する研究は、単に芸術学のアプローチ、ヤオ族社会における役割・保存と伝承・神画に描かれる神々についての簡単な論述に留まっていると言える。また、ミエンの儀礼神画は道教の影響を受けていると論述されているが、分析と考察が不足しているため論述が足りなかった。特に、神画の要素を踏まえた神画に描かれる内容の詳細な分析、神画に描かれる神々に関する文献記述の分析、儀礼における神画の使用に関する考察について十分に行われていなかった。

筆者の把握では、ミエンは様々な儀礼を伝承しているが、必ずしも全ての儀礼で神画を使用するわけではない。中国湖南省永州市藍山県のミエンの村落で行われる儀礼において、神画が

必要な場合は、儀礼の当日に祭司が自ら所持している神画を祭場に持って行く。祭司は祭場に到着後、まず祭壇の前で神画を手に持ち、唱えごとをしながら落兵落将<sup>2</sup> 儀礼を行う。その後、神画を祭壇の正面と両側の壁に掛けて掛聖儀礼を行い、儀礼に向けた準備をする。儀礼中、祭司たちは神画に描かれる神々についての記述を収めている請聖書<sup>3</sup> というジャンルの儀礼文献を読誦し、請聖儀礼<sup>4</sup> を進行する。そして儀礼の最終段階においては、請聖儀礼に対して送聖儀礼が行われ、掛聖儀礼に対して収聖<sup>5</sup> 儀礼が執行され、落兵落将儀礼に対して拆兵<sup>6</sup> 儀礼が行われる。このようにミエンの儀礼神画は、単なる祭壇を設けるためだけに掛けられる掛軸ではなく、儀礼内容と儀礼文献、さらにそれを所有する祭司と大きな繋がりを持っているのである。こうしたミエンの儀礼において重要な法具とする神画を考察するには、神画と祭司との関係・神画を用いる儀礼における神画使用の実態・儀礼において神画と組み合わせて使われる儀礼文献に関する考察を行わなくてはならない。本論では、この研究の空白ゾーンに焦点を当てて、儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践の三方向から儀礼神画を考察していく。

本論では、神画について神々の顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色、衣服の様式・模様等の項目に分けて詳細な読み解きを行ったが、これはミエン儀礼神画の特性を明確にするためである。取り扱った神画は地域的には湖南省永州市藍山県だけでは全体を明らかにできないと考えたため、近隣の江華瑶族自治县、近隣省の広西壮族自治区恭城瑶族自治县、そしてミエンの移動した地のタイ北部のナン県ムアン郡と、できる限り広い地域のもの収集し、比較分析を行った。本論では、儀礼の実践の中でどのように神画が使用されるか、神画に関係する儀礼文献の記述がいかなる内容であるか、所有する神画が祭司の儀礼執行能力と実施する儀礼とどのような関係にあるのか、多方面からの論証を試みた。論証を行うにあたり、湖南省永州市藍山県の祭司の実施する儀礼と儀礼中で使用された文書と使用された神画を事例とした。本来比較する別の地域についても同様の調査を行い事例を加える必要があるが、今回は湖南省永州市藍山県の事例のみから、神画と儀礼文献と儀礼実践を接合させた論証を試みた。

### 第2節 研究方法と研究目的

本研究は、ミエンの儀礼に用いられる神画をより全面的に考察するために、儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践を組み合わせるという独創的な研究方法を試みている。この三つの方向からの考察は、本論の第4章・第5章・第6章にあたるものである。以下、それぞれの考察の方向性について述べる。

### 第1項 儀礼神画から

ミエン儀礼神画からの考察は、広域にわたって中国湖南省永州市の藍山県及び江華瑶族自治县、広西壮族恭城瑶族自治县、タイ北部などのミエンが伝承している儀礼神画に描かれている内容を徹底的に比較分析し、ミエンが所持する儀礼神画に描かれている内容の異同を明確するのが目的である。

本論の「第4章 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画に描かれている内容の分析」では、Lemoineが *Yao Ceremonial Paintings*[1982]の中で神画に描かれている内容を紹介する際に必ず述べる点を参考にし、神画内の事象を細分化して項目に分け、情報を徹底的に読み取る作業を行う。設定した項目は主神と脇侍に分け、それぞれの配置、顔の向き、姿勢、持物、冠物、乗物、髪・眉・髭の色、衣服の様式・模様等とした。湖南省・広西壮族自治区・タイ北部などの異なる地域のミエンが持っている神画の写真資料を11組<sup>7</sup>約180点収集し、項目ごとに表で示した(別冊・表1~表20)。表の分析を通し、異なる地域のミエンが所持する同種の神画に描かれる内容との異同を明らかにするものである。

### 第2項 儀礼文献から

儀礼文献においては、専ら中国湖南省永州市藍山県のミエンが持っている儀礼文献に収められている、儀礼神画に描かれている神々についての記述を考察する。本論の「第5章 儀礼文献に記される神々に関する記述の分析」では、藍山県のミエンが伝承している神画を用いる儀礼で読誦される請聖書・賞光書というジャンルの儀礼文献に注目し、その中に収められた儀礼神画に描かれている神々についての記述を翻訳し分析することで、儀礼文献に記される神々の容貌や服飾などの特徴を明確にする。その上で儀礼神画と儀礼文献とはどのような対応関係を持っているのかを明らかにする。

### 第3項 儀礼実践から

儀礼実践について、専ら中国湖南省永州市藍山県のミエンが伝承している神画を用いる儀礼において神画が用いられる実態を考察する。「第6章 儀礼実践から見た過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の使用」では、藍山県のミエンが伝承している「掛三灯」や「度戒」などの神画を用いる儀礼の内容を考察することで、祭司が如何なる宗教段階を経て神画の使用資格を得てきたのか、儀礼に用いられる神画はどのような役割を果たしているのか、どのような意味を持って

いるのかを明らかにする。

なお、本論においては儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践の三つの方向から考察と分析を通じ、広範囲に分布しているミエンが所持する同種の儀礼神画に描かれる内容の共通点、また神画使用の一例とする湖南省永州市藍山県のミエンの儀礼に用いられる儀礼神画と儀礼文献と神画所有者の祭司と儀礼実践との関連を明らかにすることが可能になる。

### 第3節 過山系ヤオ族(ミエン)儀礼神画の現地調査

ミエンはどこへ移住しても必ず彼らの信仰している神々が描かれている儀礼神画を持っている。中国南部及び東南アジアに広く分布しているミエンが持っている儀礼神画に描かれている内容の異同点を明確するため、異なるミエン地域から神画資料を収集する必要がある。また儀礼における神画使用の実態を把握するために現地調査も必須である。筆者は研究協力者として、神奈川大学ヤオ族文化研究所が中国湖南省永州市藍山県及びタイ北部ナーン県ムアン郡のミエン村で実施した調査に参加した。また、中国のヤオ族研究者の協力を得て、単独で現地に入り調査を行った。これにより、異なるミエン地域から数多くの儀礼神画の写真資料を入手するこ



〈図2〉 神画資料収集地の藍山県・江華瑶族自治县・恭城瑶族自治县の位置図

とができ、儀礼における神画使用の実態を観察することもできた。以下に、2011年11月14日から2014年1月8日までの期間において行われた、主に儀礼神画に関連する調査について紹介する。

### 第一回調査

2011年11月14日～11月22日に、筆者は研究協力者として、神奈川大学ヤオ族文化研究所が湖南省永州市藍山県所城鎮幼江村で行われた還家願儀礼の調査に参加した。儀礼に用いられたのは、藍山県匯源瑶族郷湘蘭村に住む祭司の趙金付氏が所持する神画（1組14点13種[別冊・図1-1～図1-20]）、藍山県所城鎮団源村に住む祭司の盤喜古氏が所持する神画（1組4点4種[別冊・図3-16～図3-19]）、藍山県匯源瑶族郷荊竹坪村寒鷄沖組に住む祭司の盤保古氏が所持する神画（4点4種[別冊・図2-16～図2-19]）である。これらの神画を撮影した上で、それぞれの神画の保存状況や伝承などについて聞き取り調査を行った。

### 第二回調査

2012年11月25日～11月27日に、筆者は張晶晶氏（華中師範大学人文社会科学高等研究院助理研究員）の紹介で、広西壮族自治区恭城瑶族自治县蓮華鎮黄泥岡村の通天廟で行われた「恭城蓮花鎮勢江源五沖瑶首届盤王節」に参加し、盤王節における神画使用の実態を観察した。その場で、恭城瑶族自治县蓮華鎮に住む祭司の黄通旺氏が所持する神画（1組17点17種[別冊・図6-1～図6-22]）、恭城瑶族自治县三江郷洗脚嶺村に住む祭司の趙乙昇氏が所持する神画（1組4点4種[別冊・図7-16, 図7-17-1, 図7-18, 図7-19]）の撮影を行った。聞き取り調査の際に、方言<sup>8</sup>から漢語への通訳は張晶晶氏が行った。

### 第三回調査

2013年2月9日～2月12日に、廣田律子氏（神奈川大学教授・ヤオ族文化研究所所長）と共に、湖南省永州市藍山県匯源瑶族郷湘蘭村で春節の調査を実施した。その際に、趙金付氏から盤保古氏が所持する神画（13点12種）の写真データを入手した。第一次調査の際に撮影した写真と合わせると1組（17点16種類[別冊・図2-2-1～図2-20]）になる。また、神画の種類、伝承状況、及び神画に描かれる神々の由来について聞き取り調査を行った。

### 第四回調査

2013年11月17日～11月27日に、筆者は鄭艷瓊氏（江華瑶族自治县民族宗教事務局紀檢組組長・瑶学専門家）の紹介で、湖南省永州市江華瑶族自治县で行われた「神州瑶都2013年盤王節」

に参加し、盤王節における儀礼神画の使用について調査を実施した。鄭氏の協力の下で、鄭氏が収蔵している神画（1組17点17種[別冊・図4-1～図4-20]）、また江華瑶族自治县両岔河郷両岔河村に住む祭司の李法科(法名)氏が所持する神画(1組20点18種[別冊・図5-1～図5-21])の撮影を行い、それぞれの神画の収蔵及び伝承の状況について聞き取り調査を行った。盤王節の後、広西壮族自治区恭城瑶族自治县で張晶晶と合流し、三江郷洗脚嶺村祭司の趙乙昇氏が所持している全ての神画の撮影を行い、第二次調査の際に撮影した写真と合わせると25点24種類[別冊・図7-1～図7-26]になる。さらに、同県三江郷養牛坪の祭司が持っている神画の写真データを入手した(1組15点15種[図8-1～図8-21])。

### 第五回調査

2014年1月3日～1月8日に、筆者は研究協力者として、神奈川大学ヤオ族文化研究所がタイ北部に位置するナン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村<sup>9</sup>で行われた男性の通過儀礼である「掛三灯」儀礼の調査に参加した。儀礼の間では、神画を用いる実態を観察し撮影を行った[別冊・図9-1～図9-24-2]。この調査により、タイ北部と中国の湖南省南部及び広西壮族自治区東部のミエンが持っている神画と比較することが可能になり、中国国外におけるミエンの儀礼神画を観察する非常に貴重な機会であった。

神画資料の他に、本論では儀礼文献資料も多く取り扱っている。儀礼文献資料に関しては全て神奈川大学ヤオ族文化研究所から提供されたものである。なお、本論で取り扱う儀礼文献の出所などについては、論文の中で明記している。

### 第4節 論文の構成

本研究の主なる対象地域は中国湖南省永州市藍山県を設定している。この地域のミエンが様々な儀礼を伝承している。その中の神画を用いる「掛三灯」「還家願」「度戒」「葬送儀礼」などの儀礼は神奈川大学ヤオ族文化研究所により詳細に調査され、調査を通じて収集した儀礼文献の写真資料・映像資料・詳細な儀礼程序はウェブサイト(<http://www.yaoken.org>)に内部公開されており、通説1号から4号まで順次に研究成果が出版され、儀礼と儀礼文献に関する様々な研究が進んでいる。これらの成果は儀礼神画を考察するには貴重な資料を提供することができ、儀礼文献と儀礼実践から神画を考察することが実現できるようになる。よって、筆者にとって藍山県は儀礼神画を考察する絶好の地域である。

筆者の調査によると、中国の湖南省南部及び広西壮族自治区東部のミエンの伝承していた多

くの儀礼神画は、文化大革命の中で破壊された。そして祭司を職業とする人が減ると共に、儀礼に使われない神画を画商に売り出すことも見られる。こうした理由から、現在の湖南省南部及び広西壮族自治区東部のミエン地域では、一つの村落には多くとも1セットの神画しか見つからない現状になってしまい、一つの地域では神画資料を大量に収集することが非常に困難である。2011年から2014年までに神奈川ヤオ族文化研究所は藍山県で合わせて3組44点19種類の神画の写真資料しか収集できなかった。この数の資料は、儀礼神画に描かれる内容を分析するには十分ではない。よって、本研究は、藍山県で収集した神画資料の他には、藍山県の西南部に隣接する江華瑶族自治县、広西壮族自治区東部の恭城瑶族自治县、タイ北部ナーン県ムアン郡ナムガオ Nam Ngao 村から収集した神画資料も取り扱っている。ミエンの儀礼に用いられる神画について広域にわたって比較検討することより、本研究で主に考察する藍山県の儀礼神画の特殊性と普遍性を理解しようとするものである。

こうした理由で、次のような章構成を取った。第1章の序論で、これまでのミエン儀礼神画に関する先行研究を批判的に分析することによって、本研究の課題を設定し、課題を解決する方法を述べる。第2章で、湖南省永州市藍山県におけるミエンの概況を示す。第3章では、ミエン儀礼神画の定義を行う。儀礼神画の種類と名称を解説し、藍山県の祭司が儀礼神画を所有する資格と権限について述べる。

こうした調査地域及びミエンの儀礼神画の大枠を踏まえた上で、儀礼神画の考察に移る。第4章では、儀礼神画に描かれる内容の分析を行う。まず分析に用いる11組の儀礼神画資料の保存や伝承などの状況について詳細に報告し、次いでこれらの神画資料をもとに作成した「神画内容異同表」について説明する。表の分析から、異なるミエンの地域の同種の神画に描かれる内容の異同を明らかにし、神画の地域的な特殊性と普遍性を示す。その上で、神画から見たミエンの特色及び道教的な影響を論じる。

第5章では、藍山県の神画を用いる儀礼に使われている儀礼文献の請聖書と賞光書に収められている、神画に描かれる神々に関する記述を翻訳して紹介する。記述の分析を通して文献記述に記される神々の容貌や服飾などの特徴を明確にする。その上で、儀礼神画と儀礼文献とはどのような対応関係であるのかに論及する。

第6章では、藍山県の儀礼実践において儀礼神画はどのように用いられているのかを考察する。まず、神画を用いる儀礼について概観する。次いで、「掛三灯」と「度戒」儀礼中での授法と関わる儀礼を考察することで、藍山県の祭司がどのような宗教段階を経て神画の所有資格を得てきたのかを論じる。それから、神画を新たに制作した際に行われる、神画に魂をいれる開光儀礼の事例を紹介し、「開光疏」「開光表」という開光儀礼に用いられる儀礼文献から見た神画制作の理由・開光儀礼の内容・神々に対する祈願の内容などを分析することで、開光儀礼

の目的と意味を明確にする。さらに、神画を用いる大規模と中規模の儀礼の中で、直接に神画と関わる儀礼の内容を考察し、儀礼における神画の役割を明確にする。これらを踏まえた上で、儀礼神画の持つ意味を明確にする。

これまでの儀礼神画・儀礼文献・儀礼実践からの考察を踏まえて、第7章の結論では、湖南省永州市藍山県の儀礼神画の特殊性と普遍性、儀礼神画と儀礼文献と祭司と儀礼実践との関連を明らかにする。

[注]

- 
- 1 本地図は、インターネットからダウンロードした白地図に地名を加えて作成したものである。
  - 2 廣田律子によれば、落兵落将とは、祭司が使役できる陰界の将兵を祭壇に降ろすことであるとする[廣田2013a: 11]。
  - 3 『中国湖南省永州市藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告 I』によれば、ヤオ族の儀礼で使用される儀礼文献は、通過儀礼に関する写本、儀礼に用いる書類、神々を崇拜する神歌に関する写本、神々の呪文に関する写本、符、罡歩、手訣に関する写本（吉日を選ぶ暦、宗教職能者の受礼の状況を記したもの等が含まれ、内容からは賞光書・伝度書・請聖書・意者書・歌堂書・超度書・歴書のジャンルに分類できると述べる[廣田ほか 2011: iii]。ここの請聖書は、請聖儀礼を行う際に使う儀礼文献である。
  - 4 神々を祭壇に降臨するように招請する儀礼である。
  - 5 神画を祭壇から下ろし、巻いてひとまとめにして置くことである。
  - 6 廣田律子によれば、拆兵とは、祭壇を片付け神々を送ることであるという[廣田2013a: 11]。また、「落兵落将」の際に、祭壇に降ろした陰界の将兵を祭壇から呼び出すこともあろう。
  - 7 本論の分析に用いる11組の神画資料に関する詳細は、第4章の「第1節 分析に用いる神画資料について」で述べている。
  - 8 現地では日常用語として「桂柳話」という方言を使っている。
  - 9 当該村はヤオ族文化研究所客員研究員である吉野晃氏（東京学芸大学教授）の長年にわたる調査地であるという[廣田ほか 2014: ii-iii]。